
桐生京介シリーズ

麻生柚葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桐生京介シリーズ

【Nコード】

N5942M

【作者名】

麻生柚葉

【あらすじ】

「日常とは何か。」
それは酷く曖昧で、とても定義が難しく一言でが言葉に出来ないの
でございます。

サテサテ、そんなこんなで始まる非日常。

いえ、桐生君にとつての日常が幕を開けるのでございます。

日常と、非日常、そんな境目にいる青年桐生京介が行く。普通の日常と人ならざる者と関わる非日常。若干ホラーを交えて描くお話・

・
予定。

長い長いと思われた梅雨の時期にとつの昔に別れを告げ、嘘のようにお天道様はカラリと晴れ渡り
陽はジリジリ、蝉はミンミン啼くそんな夏の暑い日のことでございます。

帝都・四葉、和洋様々な服装の若者が闊歩する大通り。

一人の青年が汗一つかかず涼しい顔をして歩いております。

この彼、名を桐生京介と申しまして、ついこの間成人したばかりでございます。

容貌は細面、透けるような白い肌、色素の薄い髪。

人の良さそうな笑顔で愛嬌のある顔立ちをしておりました。

文字だけで見ると少々異国の風を感じさせ、こ洒落た雰囲気。

しかし実際はと言いますと、栄養の足りなそうな青白い表情に頼り無さそうな小柄細身のお姿。

色素の薄い髪が貧弱に拍車をかけまして、纏う袴は色あせて大きさは身の丈に合わず余り気味。

絵に描いたような何処にでも居る貧乏学生の一人にございます。

「日常とは何か。君は如何様に、定義するのでしょうか？」

ぼつり、と呟いた小さなそれは、道行く大勢の話し声に紛れ。
しかし、それは京介君一人の世界に響き渡り。

何の変哲の無い、京介君の背後に迫る影が歪んだのでございます。

「例え摩訶不思議な事が起こったとしても、それが続いてしまえば

日常に埋もれる。

日常とは全てを許容し飲み込む悪夢・・・

と、小生は思っています。」

人波に逆らい立ち止まり、眉を寄せながら避ける人々を無視して。感慨深げに空を見上げては、一人溜息をつく京介君。

憎たらしい位空は青くて雲一つ無い快晴。

影に問い、しかし影は問いに答えずに

京介君は恨みがましい視線を背後の影にむけてちらり。

しかし影の方はと言いますと、ただ当然とばかりにその場に留まっただけにございました。

（ああ、何て何て・・・

人間と言うものはこの日常に埋め尽くされていて平気なのだろう。

）

「・・・・・・」

続きの言葉を発そうと、口を開いては口籠り

諦めたように肩を落とすと、再び雑踏の中に紛れ込みまして

その様子を面白がるかのように京介君の声ではない、クツクツと晒い声がしたのでございました。

サテサテ、そんなこんなで始まる非日常。

いえ、京介君にとっての日常が幕を開けるのでございます。

果たして、それは喜劇なのか悲劇なのか。

判断するのは貴方しだいでございますよう。

それでは、桐生京介の日常。

お送りしようじゃありませんか。

吉頃

始まりノ事

サテサテ、今回お話しするのは、影嬢についてにございます。

その影嬢、本来ならば何の変哲の無く京介君の後ろをついて回る“影”

ただし、それは自我を持っていなければの話でございます。

それは、いつのことだったでございましょうか
幾分、昔過ぎて京介君とて覚えていない事でして
昔の昔、とでも言っておきましょう

遠い日の幼い京介君が一人蹲り、シクシクと泣きべそをかいている
時でございました。

するとどこからか、奏でる様な、唄う様な、どこかよく聞いたこと
のある声が聞こえるではありませんか。

それはもう、飛び切り驚いては京介君
周りをキョロキョロ見渡しますが、周りには人っ子一人見当たらず
思わず首を傾げ、気のせいだったのかと思ったのでございます。

《アラアラ、無視をするのかイ？》

それを、咎める様に響く声

慌てて探すも声の主は見つからず

しかし、よく耳を澄ませて、神経を研ぎ澄まさせて

探し当てたら、吃驚仰天

なんと、自分の影から声が聞こえるではありませんか。

「なっ・・・なっ・・・!」

これは何とも驚いた

影の口に当たるであろう部分が、声に合わせて歪んでいるのです。
います。

しかし、これだけでは飽き足らず

その声は京介君の声そのものであったのでございました。

吃驚、尻餅をつき声も出ない京介君の前に

その“影”は楽しそうに笑い声を上げるのでございました。

そんなこんなで、京介君

己の異質な“影”の存在に気づいたのでございます。

京介君の姿を映す“影”ですが、決して京介君と同じ存在では
いません。

己の自我を持ち、京介君とは別の生き物と言っても問題は無く
そんな“影”と共存していくうちに、“影”は友になり信頼の置け
る者になり、

今となつては京介君になくてもならない存在にまでなつたのでござ
います。

日々、京介君が成長すると共に、当然のようにその“影”も成長す
るわけでありまして

昔は幼子の姿だった“影”も、京介君に合わせて成長し
姿を同じくしているのではございますが

京介君はある日気づくのでございます。

“影”は自分と同じ、男ではなかったと

声変わり前の京介君

確かに、声だけ聞くんらば、どちらかなどと判別が付き難いのでございます。

同じ声、と言いましてもその声はどこか柔らかく感じられ

話し方も女性らしさが出ているように感じるではございませんか。

姿だけは京介君と変わりこそ無いものの

他の物が、“影”は女性だと申しているのでございました。

そう、それに気づいたのは館花亜来嬢に会った時の事なのでございますが、

そのお話はまた後日にいたしましょう。

嗚呼、何て非現実

京介君が、これでは頭の可笑しな人では無いか
そう思われても仕方はございませんが

確かに“影”は存在したのでございます。

決して、他の人に見える聞こえる訳ではなく

他の人の前ではどんなに喋り散らしても、“影”はただの影なので
ございました。

しかし、京介君にとっては確かな存在

そして、深い深い縁で出会った“人ならざる者”たちも“影”の存
在を見る事ができ

その者たちからは、女性である事から“影嬢”と言う愛称で呼ばれ、

影嬢が確かな存在だと肯定するのでございました。

ただ、貴方には見えぬだけ
貴方にとっては非現実でも、京介君にとっては現実の事でございます。

弐項 影嬢ノ事

日常。編 参項 日常ノ事

「小生は、摩訶不思議な事を望んでいるのでしょうか。」

一人呟く、京介君

その声を拾うものは周りには居らず、仕方無しに影嬢が拾うのでございました。

《アタシに言われても困るワ、京介》

「小生は日常が怖い、この生活が普通に感じるようになるのが怖い
最初は君の事も、この帝都の事も、歓迎すべき目新しい出来事で
あつたはずなのに

今となつては、可笑しいかな、これもまた日常になってしまった
のサ」

しかし、そうは言っても人は日々、止まる事無い時を過ごしており
まして。

それ故に慣れていく生き物でございます。

京介君はどうにもそれが気に食わないご様子

《そうは言っても、今の生活が、アンタの日常じゃないのサ》

「・・・日常だと思いたくないンだよ。小生は」

京介君の生活は、人から見れば普通じゃございません。

だからこそ、それをどうにも認めたくないと思ってしまう心境で

《結局、アンタは日常を怖れてるンじゃ無い。

この生活を日常だと認める事で他の人との差が開いていくのが怖いのだ

帝都に出て来たのだって、非日常を求めた為じゃアない
ただ、人の多い“帝都”に紛れたかったんだ

「そうなのだろうか・・・」

《そうサ、人ならざる者に囲まれて、アンタは人から遠くなる事を怖れているのヨ》

「しかし、小生は君たちが嫌いなわけでは無いんだよ。」

《だから、アンタはワガママなのサ。

人の言う“普通”を望んでいるくせに、どこかで“非現実”を逃したくないのだ

どっちも、中途半端者。サッサと決めておしまいヨ》

影嬢は楽しそうにクツクツ笑いまして

それを受ける京介君は渋い顔をしたのでございます。

もしも、彼女に顔があつたなら、ニタリという表現がピッタリでございます

意地悪く、京介君に突っかかっては一人楽しんでいるのでございます。

「嗚呼、分った、分ったよ

認めようじゃアないか。小生は、このまま人間離れしたくない。

しかし、人とは違う自分に優越感を感じている

どちらにも席を置き、どちらにも通じていたい。

だからこそ、今が日常になっては困る・・・・・・・・・・の
だ。」

そう言う事を考えている時点でもう人とは違っただろうと
影嬢は一人、声には出さず心の底でコソリと嗤ったのでございま
した。

《変な問答で逃げようっても、アタシには無駄サ》

「・・・ああ、君には敵わないよ」

やれやれと、肩をすくめる京介君
長い間一緒に居る二人ですが、京介君は一度も影嬢に勝てた事が無
いのでございました。

参項 日常ノ事

日常。編 肆項 京介ノ事

実はこの京介君、此処いらでは一番有名な四葉大学という所に通う学生でありまして

田舎から、わざわざ上京してきた一人にございます。

真面目に真面目

しつかり休む事無く通い続け、途中居眠りするで無し影嬢に問うなどと如何様を働く訳でもございません
絵に描いた様な勤勉学生

かと言つて、頭が良い訳ではございませんが

そんな京介君、上京してからは幼馴染の家にご厄介になっておりまして

幼馴染とは申しまして年々の離れているため兄妹の様な関係ではございません。

ハテハテ、何故田舎から出て来たというのに幼馴染がこの帝都・四葉に居るのかと申しますと

ただ、その幼馴染の館花家

実家の爺様の調子が悪いと、態々一家揃つて看病に来ておりましてその実家が桐生家のお隣さんと言っただけの話

年月にすると、四年ほどでございましょうか

京介君と館花家の付き合いは、そう長くはございませんが
なんせ、過疎化の進む田舎の村の事

たった四年、されど四年

館花家の旦那様である晃久氏を第二の父に、奥様の壱子夫人を第二の母に

そしてご令嬢の亜来嬢を妹のように思うことに違和感はないわけで仲良くさせて頂いていたのでございます。

京介君、十から十三の時のことでもございました。

その後、館花家は四葉市に帰って行ってしまったものの

交流が途切れる訳でなく

そんなこんなで四葉市にある館花家のお屋敷に一部屋お借りする事が出来ているのでございます。

貧乏学生には実に有り難い環境

お家賃は、空き部屋だということで嬉しい事に家賃無しで住まわせて頂いて

食費諸々は納めておりますが、足りない分は手伝いで賄いましてそして、極め付けに美味しい壱子夫人の手料理が毎日食べられるのでございます。

大学からも、さほど遠くなく

この京介君、他の貧乏学生からは想像も出来ないほどとても幸せな環境に居るのでございました。

ただ一つ、問題なのは神社の神主である館花家

勿論の事、祀っている神様なんかが居る訳で

不可思議な影嬢がついている京介君、その神様に気に入られてしまっています

そのままずるずる芋蔓式に、否応無しに人ならざる者たちと交流が出来てしまったわけですが・・・

そのお話も、長くなるのでまた先の機会に縁があつたらお話することにしたでしょうか。

肆項 京介ノ事

日常。編　　伍項　目ノ事

その日も暮れて、授業が終わり
なかなか長い間拘束されて、京介君の腰が少し悲鳴をあげた所
でございます。

「よう！京介、授業お疲れ」

「ああ、鈴也か・・・お疲れ様」

そんな京介君に声をかけたのは、背の高い青年
鈴也と呼ばれたこの彼、名を柏木鈴也と名乗ってはおりますが
実の所、柏木鈴と言う名の青年でございます。

サテ、この鈴也君どうして鈴と言う名前なのかと言いますと
娘が欲しいと期待した両親が、先走って付けたものでして
鈴を転がすような声の愛らしい娘に育つよう夢見ておりました。
生まれた時に変えればいいものの、何を思ったかそのまま名付けら
れてしまいました

その可憐な響きとは真逆の青年でございます。

小柄な京介君が見上げるほど、背の高い美丈夫
二力つと笑ったその表情は男らしく

線の細い京介君とは違い、とても頼り甲斐のありそうな頼もしさが
ございます

その性格も、サッパリと竹を割ったような性格をしており、より一
層男前に磨きがかかるのでございました。

しかし、残念な事に名前は女物

似合わないにも程があり、馬鹿にされ続けた幼少期

意地で鈴ではなく、鈴也と名乗っているのでした。

「・・・鈴也、その癖は止めた方が良い」

「京介はいつもそれだな。」

ソウ、これは京介君が会うたびに鈴也君に言う言葉

それを言うのはいつも急でありまして

会話の途中、顔を合わせてすぐ、いつでも突飛に口に出す言葉に「
ざいます。」

今回も、行き成りの話でしたのでございまして

学校からの帰り道

特に変わった所も無く、くだらない話をしている真つ最中

その話題を出す基準は何で出来ているのございましょうか。

「鈴也、見えないものから目を逸らしちゃア、いけないよ」

言われた鈴也君は、京介君の言葉が理解できず

笑い飛ばす事しか出来ないのでした。

「見えない振りはイケナイ。君は本当は見えているんだろう?。」
「・・・」

どうする事も出来ずに頭をかく鈴也君

これを言っている時の京介君をどうにも受け入れる事が出来ないの
でございます

(これさえなけりや、良いんだけどな)

人からはよく、京介君と友達をやっていけるな等と言われている理由
これらの事を指しているのでございます

この京介君、己には理解できない、実に気味の悪い言動を吐く事が
さらにございまして

ただ、この“癖”を止めろという言動は、鈴也君にしか言わないの
でございますが・・・

その雰囲気故か、一度それを見たものは京介君に近づこうとはしな
いのでございます。

そういった面を踏まえた上で鈴也君は京介君とつるんでいるのでご
ざいますが

実の所、京介君には学校で友達が鈴也君しか居ないのでございまし
た。

「ねエ、早く気づかないと、君、目を喰われてしまうよ」

太陽の光が雲で隠され

京介君の瞳が怪しく光ったように鈴也君は感じられ
思わずブルリと身震いをしてしまったのでございました。

《クスクス、本当に、喰われちゃうわヨ》

影嬢の声は鈴也君には届かず

京介君の耳にだけに響きわたりました・・・

カラリとした夏には似合わない、じっとりとした重い風が吹いたの
でございました。

伍項 目ノ事

日常。編 陸頂 過去ノ事

サテサテ、今回は以前お話いたしました影嬢と亜来嬢についてでございます。

館花亜来嬢

先にお話しました、京介君の幼馴染であり、館花家のご令嬢でございます。

“亜来”^{あくる}など、中々見ない名前ですが、彼女の父である晃久氏古き友人の名前を文字って付けたんだとか、なんだとか

年は数えて十四になったばかりの、しっかり者のとても愛らしい娘にございます。

京介君とは年の差六つ

幼馴染よりは兄妹の方がしつくりと来る間柄

そんな二人が初めて出会ったのは京介君が十、亜来嬢が四つの時の事にございます。

その当時から、影嬢・・・

いや、この時はまだ“影”でございましたか影の存在を確かなものと捉えていた京介君今でなら、開き直っている部分が多いものの

幼い当時は虐めを恐れ隠し通していたのでございました。

しかし、普段はそんな素振りは一切見せないものの、この時ばかりは別でして

うっかり、亜来嬢がいるのにも関わらず、会話をしてしまったのでございます。

《オヤ？亜来ちゃんが驚いているヨ》
「えっ！」

先に気づいたのは、影。

いえ、本当は気づいていたのに京介君に教えずにいたのでございまして

実に意地の悪いお人でございます。

振り向いて、慌てふためる京介君

それを可笑しそうにケラケラ晒うのは影

そんな雰囲気壊したのは、他でも無い亜来嬢の一言で

「兄様？その女の方・・・は何方ですか？」

「へっ！」

《おどろいた！亜来ちゃんには、ショウセイが見えているみたいだね》

影が見えている

京介君、その事実には驚きつつも、そこは神社の娘

まあ、見えていても可笑しくは無いと高速で頭を回転させ

しかし、驚くべき事はここにもう一つ

「女の方・・・って誰の事だい？」

「兄様とお話しているのは女の方ではありませんの？」

不思議そうに首を傾げる亜来嬢

そう、この影を女性だと確かに言い切ったのでございました。

自分の“影”あるこの存在

京介君、ずっと影を同じ“男”だと思っていた訳でして
同じ声、同じ形、同じ喋り方・・・

そう、疑う事無く決め付けていたのでございます

《いやア、この子は凄いなエ京坊!“アタシ”が分るなんてサ》

いや、そんなはずは無い

そう思った京介君の思いをバサリと切り捨てご免とでも言うように
あっさりと口調を変え女性である事を肯定する影

付いて行けずに京介君、目を白黒白黒

間違った事を言ったのかと、亜来嬢はオロオロ
楽しそうに笑う影はケラケラと

「影が女性だなンて・・・!」

手鞠がコロコロ、コロコロ転がって

京介君の言葉もコロコロ、コロコロ転がって

この時、“影”は“影嬢に”なったのでございました。

陸頂 過去ノ事

そう、確かにあの時亜来嬢は影の事を女の方だと言ったのでござい
ます。

その時は、よくも分ったものだと思心した京介君
しかし、今、当時を思い返してみますと亜来嬢が影を女性だと決めた

が、正しいのでございまして・・・

それは“言霊” 亜来嬢の持つ力

女性だと京介君とは別の者と捉えた亜来嬢の言葉があったからこそ
今の影嬢がいるわけでして

幼い京介君には気づく事が出来なかったのでもうございました。

日常。編 漆頂 日々ノ事

こう見えて、京介君

影嬢の存在や、周りの交流関係のお蔭様で皆様には非日常に思える生活をしておりますが

案外、それ以外は普通の日常を過ごしているのでございます。

それはと言うのも、前にも一度申しましたがこの京介君

“人間離れしたくない”と言う意思がそりゃあもう強くございまして極力、普通の人と同じ生活をと心がけてはいるのでございます。

ただし、それが上手くいっていればの話と言うもので

そこはなんと言っても京介君

そう簡単に人々の生活に紛れられる訳でなく

大学では、一人浮く

親しき友人は鈴也君ただ一人

ご近所様では可笑しな人だと、ちよいと有名・・・

全く持つて京介君にしてみれば不本意で残念な結果なのでございまして。

まア、周りの目は置いておいて

京介君の一日と言うのは他の人とさほど変わりは無いのでございませう。

朝は早くに目を覚まし

館花家のお手伝いに励む京介君

境内の掃除から、庭に水遣り、はたまた炊事のお手伝いまで

まア、その日によって変わりますが恩を返すとばかりに張り切り多少の空回りをしつつも、精を出すのでございましてすると朝食は壺子夫人の手料理が、普段以上にとても美味しく感じられるのでした。

そんなこんなで亜来嬢を学校に送り出し

京介君もいそいそと学校に向かうわけですが

その途中、影嬢にちよっかい出されたり、からかわれたりあえて無視し、見ない振りにございます。

学校では至極真面目に授業を受けまして

真面目なだけで、全て理解出来るわけでもなく

頭を抱えながらも、意地で何とか付いていくのでございました。

一人寂しく京介君

何をするにも一人でございまして

花の無い虚しい学生生活を送っているのでございます。

ソウソウ、友人である鈴也君は男女共から人気者

四六時中一緒にいるわけではございません

哀しいかな

鈴也君とは学科が違い、受ける授業が被るのは気休めにかする程度

とは言つても、鈴也君

有り難い事に京介君と居る時間がこれでも一番長いのはございますが。

そんなこんなで、授業も終わり

疲れながらの帰り道

懐と時間に余裕があるのなら、行きつけの甘味所で一休み駄目なら、そそくさ家に帰りまして

勉強や手伝いに励むのでございました。

ほうら、“普通の日常”でございましたよう？

京介君とて、未だ人間なのでございます。

ただただ、ちよいとばかり危うい“普通の日常”と“可笑しな非日常”の境目に立っているだけでして

そう、日常も非日常も紙一重

京介君に限らず、貴方もソウでございましょう。

ふとした瞬間、一歩間違えればすぐに世界は移ろっていくのでございまして

貴方と違って、京介君はどちらにも属さず、その境界線に立って居るだけ

その違いだけでございます。

右に倒れるか左に倒れるかは今後の京介君次第でございしますが。

それを邪魔しようとする影がチラホラと・・・

見え隠れしては耽々と京介君の背に迫っているのございました。

漆頂 日々ノ事

日常。編 捌頂 恋ノ事

京介君が恋するは、行きつけ甘味所の看板娘

優しく笑顔が可愛い娘に京介君

瞳は奪われ、心は持つて行かれ

それはもう、熱い視線を送っていたので・・・

と、まあ、言えれば良かったのですが

なんせこの京介君、恋だの愛だの未だ理解が出来ぬ感情で
惚れただ腫れただが一切分らず

日々過ごしてきたのでございます。

“人間”と接する事があまり無いとは申しましても
いささか、これは行き過ぎで

二十歳になっても浮いた話が一度も無いのでございます。

亜来嬢は大切ではありますが、至ってこれは家族愛

モテる柏木君と一緒に居る所為か

周りの娘は、眼中に無し、全て空振り、京介君を素通りするのでございまして

柏木君にお熱気味

まアそれを京介君、気にした様子もございませんで

どうでも良いと思っっているのも、問題なのではございますが

オオっと、話がずれたではございませんか

そう、今回お話しするのは甘味所の看板娘

名を湯元香澄と申しまして、年は数えて十八歳

看板娘と言っただけに、明るい笑顔の可愛い娘なのですが
ちよいとお転婆、そそっかしい

楚々とした亜来嬢のようなご令嬢とはいささか違う種類の娘で
います。

しかし、その明るさや元気な所が中々の愛嬌がございまして
界限の男性群に人気有り

甘味所といった場所にも関わらず、男性客もチラホラ見えるので
ございました。

実はこの香澄嬢、京介君を気味悪がる事無く接してくれる数少ない
女性でございまして

柏木君や亜来嬢は“こっち側”と認識している京介君
唯一の“あっち側”・・・

言わば“普通の人”の友人でございました。

“普通の人”から見れば、どうにも気味が悪がられる京介君
何故、香澄嬢は平気なのかと申しますと

如何せん、この香澄嬢中々に鈍い鈍い・・・

例え、京介君が変な事を言い出しても理解が出来ないのでござい
まして

少々抜けた娘でございました。

サテサテ、どうしてこの香澄嬢と京介君が知り合えたのかと申し
ますと

全て亜来嬢のお蔭でございまして。

年若いながらに大人びている亜来嬢と、年の割りに子供っぽい香澄嬢
年は離れているものの、これで仲の良い関係を築いているようござ
いまして

京介君はそのお零れに与ったという訳でございまして。

まア、実の所この亜来嬢、浮いた話の無い兄を心配し、交流を広げてあげようと考えたのでございまして
姉が欲しいなどという思惑はございますが
何て、出来た妹なのでしょうか
しかし、京介君にはサッパリと伝わっておらず
妹の心兄知らずとでも言いましょうか
全く持って駄目な京介君なのでございました。

捌項 恋ノ事

日常。編 玖項 手伝いノ事

「おい、京介君」

「はい、なんでしょう？」

場所は変わって、館花神社

ちよいと、お掃除する手を止めて、竹箒片手に京介君
すっかり、その姿が板についているのでございます。

これで良いのか、四葉大生

本人に至っては、喜びそうな言葉ではございますが。

そんな彼に声をかけましたのは館花家御当主晃久氏

亜来嬢の父であり、この館花神社の神主でございます

簡易ながらに狩衣衣装に身を包み

穏やか、と言ふ言葉が全身から滲み出ているようなお人でございま
す。

「いやあね、何もそこまで頑張らなくても良いんだけどな」

京介君の竹箒の先を指差し

その先には大量に集まった芥やら葉やら

「小生は居候の身ですからねエ、これ位は当然ですよ」

「・・・そうは言ってもねえ」

至極当然と胸を張って答える京介君

予想外にも晃久氏、うつむ、と顎に手をあて考え込んでしまひまして

「なっ、何か問題があつたでしょうか！」

「問題・・・問題かぁ・・・」

「！」

「ああ、いや、別に問題じゃないっちゃア、問題無いんだけどね」

一体どちらだ、と言いたくなる様なご様子の晃久氏

そんな様子に京介君

青くなったりホツとしたり

傍から見ていて、面白い光景でございました。

「あらあら、この人は仕事が無くなってしまつて怠けてしまつのが怖いよ。」

そつ、クスクスと笑いながら登場なさつたのは

奥様である壱子夫人

その立ち姿は凛としており、清楚な大和撫子の様なご婦人でございます。

「おい、壱子！」

「だつて、本当の事でございましょう？」

京介サンにお仕事取られた気がして手持ち無沙汰にたっているのですよ。」

焦る、晃久氏を尻目に

この壱子夫人、亭主を立てる慎ましやかな女性ではございますが例に漏れずこの夫婦、実際は壱子夫人が手綱を握っているようで尻に敷かれるとまでは行きませんが、亭主関白とも行かないご様子

「でも、小生はこのくらいの雑用程度しかお手伝い出来ないンでありまして……」

「その雑用であるお掃除が、大好きなんですよ。この人は」

「むっ、」

何を隠そう、このお方

綺麗好きと言いますか、大層掃除が好きな性分でございます

京介君が来てから大分経ち、ここまでよく我慢してきたと言う所

そんな晃久氏に田舎に居た頃の印象が強かった京介君は驚いて驚いてまあ、壺子夫人の実家だった為に勝手に動くわけにもいかなかっただけなのではございますが

「ですから、仲良く二人でお掃除してくださいね。

はい、旦那様」

「むむむ、」

終始にこやかに微笑を浮かべながら壺子夫人

持ってきていた竹箒を晃久氏に手渡すと

顰めっ面の晃久氏と、ポカンとしている京介君を放って置いて何事も無かったかのように去っていくのでございました。

玖頂 手伝いノ事

日常。編 拾頂 夢見ノ事

夢、幻、空想、そしてまやかし
その一言で片付けてしまえば、話はとても簡単でございます
京介君にとっても、良かった事にございましょう。

されど、現実とはそう簡単にはいかず
しかと見ているようで虚像を掴み本物は見えず
翻弄しては惑わし、難儀な物でございます。

あっちへ、ふらふら
こっちへ、ゆらゆら

何処へ行くのか、迷える蝶は
何処を目指すか、彷徨う影は

『京介サ ン』、『京介 君』、
『ー』、『 介』、

呼ぶ声は何処から聞こえるのか、
いや、呼んでいるのはこちらの方が
果たして呼ぶのは誰なのか
答えても良いモノ・・・なのか

ぐるぐる、ぐるぐる、廻りに廻って
言葉だけが過ぎ行くのでございます。

・・・お かゲ ト

きよ っ い
く ナ コツチ あい
む お い !
に きょう すけ

「……京坊っ!」

「へっ、あっ、嗚呼」

影嬢の呼び声に漸く反応を示す京介君

グラリと揺れる感覚に、嗚呼眩暈がなどと頭では悠長に思っているので、

頭に反して体の方はいいますと、倒れまいと足を踏ん張り耐えるのでございました。

《ヤレヤレ、京介は一体何をボケっとしてるんだか……》

「……少し、考え事をしていたんだよ。」

大きく息を吐き出しまして、しかと前を見据える桐生君

聞こえる音は普段と変わらぬ雑音で

耳を塞いでみても、聞こえる音は日常の雑音でございます。

しかし、よおく耳を澄ましてみると、何処からとも無くジジッ、ジジジと何かが聞こえる気がするではございませんか。

雑音に塗れて拾われる音は何か。

閉じる事の出来ない耳には聞かないという選択肢は無いのでございまして

暑さの所為で無く流れ落ちるこの汗は何を意味するのか……

着実に、一步また一步と時は過ぎていくのでございました。

拾頂

夢見ノ事

影嬢の呼びかけに答え、現に戻つて来た京介君
果たして、他の声に答えていたのならば・・・
一体何処に戻つて行つたというのでございましょう

日常。編 拾壹項 立ち位置ノ事

《それで、立ち位置は決めたのかしら?》

深い深い夜の闇である筈のこの場所に

紛れていても、それは確かに存在しているのでございまして
奏でるように、唄うように

その旋律を、響かせているのでございました。

「小生は、小生は・・・」

《そんなに未練があるのかしら、この生活に
いつだってアンタは、“そっち”に恋してる》

闇は語る、その濃度をますますまして

闇は唄う、美しい歌声を空気に溶かして

そして、影が晒う、それはもう愉快そうに

《サツサと決めておしまいヨ》

昼間ならば賑わう筈のこの通りも、この時間帯になると辺りには人
っ子一人見当たらず

傍に立つ瓦斯灯がゆらゆら、ゆらりと

夜遅くと言った闇の迫る時間帯では無いにも関わらず

その小さな灯りは俯いた京介君の表情を照らすことは無いのでござ
います。

《ねエ、京介。いつまでもこのままじゃ逆にお前が壊れるヨ。》

俯いた京介君、その顔には苦渋の色がございまして
薄い唇を噛み締めていたのでございました。

《迷うのは構わないサ。ただね、時はまっちゃくれないヨ。》

からかう様な色は一切存在せず

普段とは違う音色のその言葉には真剣さがございました。

しかしその言葉に答える声は無く

ジリリと瓦斯灯の燃える音だけが微かに鳴るだけでございます。

ゆらゆら、ゆらゆら

それは瓦斯灯の灯りの音でございましょうか。

ゆらり、ゆらり

それとも、暗闇が灯りを飲み込む音でございましょうか。

背後に迫るものとは一体……

本来ならば、有り得ない静寂が広がっていきまして

閉ざされてしまったかのように、京介君の耳には何も届く事がなかつたのでございます。

そして何かを振り払うように早足に、京介君は振り向きもせずその
場から立ち去るのでございました。

聞こえない、聞こえないと

後に後悔するのは京介君でございますのに・・・

一体、影嬢の言葉はどれだけ京介君に届いているのやら

無意識に塞いだ耳には、何も届く事が出来ないのです。

サテサテ、お楽しみいただけましたでございましょうか。

京介君の“日常”

いえ、“非日常”の方でございましょうか。

判断は、貴方にお任せする所存にございます。

オヤ？本当にただ京介君の日常について語っただけでは無いか・・・と疑問に思いでございましょう。

そうでしょう、そうでしょう。

まあ、このお話が始まりに過ぎないという事でございまして盛り上がるお話のさわりはこの先と言っても過言ではございません。

鈴也君が目を逸らせているモノとは

亜来嬢の“言霊”の力とは

人ならざる者との関係とは

この先の京介君の立ち位置とは

京介君の背後に迫っているもの・・・とは

ちよいと、もったいぶらずに聞かせなさいとご希望でございしますか。

オヤオヤ、せっかなお方も居たものだ。

残念、無念

意地悪してるんじゃないアございません。

私の方も、語りたくて仕方が無いのでございますよ。

実はもう、幕閉めの頃合にございます。

早く帰らないと、闇が挙って襲ってくるやもしれません。

なんたつて、彼らはお日様に關係なくどこにでも潜んでいるのでございまして

虎視眈々と貴方の背後から・・・

おおつと、驚かせましたでしょうか。

あまり長い間ここに居られると、ここから出れなくなってしまうかも知れないのでございます。

この話、決して嘘ではございません。

ですから、さつさとお家に帰りましょう。

決して、帰り道振り返ってはいけませんよ。

もし、振り返ってしまったら、この場所に引きづり込まれてしまうやも・・・

二度と、ここから出られなくなるなんて事はお嫌でございましょう？

大丈夫でございます。

貴方が続きを望んでくださるのならば、私は必ずまた貴方の御前に現れましょう。

約束でございますよ？

サテサテ、“また”の機会がございましたら是非にお話を聞いていただければ幸いにございます。

お送りしたのは語り手、麻生柚葉でございました。

日常。編 拾貳項 終わりノ事 . . 完 (後書き)

日常。編完結です。次からは縁合。編が始まるはず。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5942m/>

桐生京介シリーズ

2010年10月25日23時02分発行